

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.15 2022年4月28日発行

巻頭言

『心強い仲間とともに』

高橋 恵里 (国際リハビリテーション研究会事務局長、
東北福祉大学健康科学部)

〔巻頭言〕
『心強い仲間とともに』
高橋恵里

〔特集〕
『コロナ禍で広がる、医療格差～パラグアイ共和国の現場から～』
長田真弥

〔連載〕
『山口高橋の研究万華鏡』
『研究フィールドと研究対象と。』
山口佳小里

〔コラム〕
『世界のめがね』 『モンゴルの暮らしから学ぶ』
大西海斗

〔お知らせ〕

2021年度総会後より事務局長を務めさせていただき、もうすぐ1年が経とうとしています。現在事務局では、ニュースレターの発行、新たに公開されたHPの管理、国際リハカフェその他のイベントの企画・運営、学術部管轄である学術大会運営補助および学術誌発行補助、その他の管理業務などを行っています。この中で、ニュースレター編集チームの組織化、全国4チームでの国際リハカフェの企画・運営、学術大会の地方開催などにより、関わってくださる方々が増え、現在では約25名の仲間が活動を支えてくださっています。皆さんの国際リハへの熱い想い、豊富な経験、行動力にいつも刺激をいただいております、感謝の気持ちでいっぱいです。

事務局の仲間は、公私ともに大きな役割がある中で、様々な形で研究会に関わってくださっています。私事ですが、私自身は協力隊から帰国後、子どもを出産して宮城県に移住したことで、国際リハ分野との関りは薄れることを覚悟していました。凶らずもCOVID-19によるオンライン化の恩恵を受け、地方在住の私が事務局長を務め、全国に点在する仲間と連携を図ることができています。その一方で、これまでは総会・セミナーや学術大会などで実現していた、直接会って知り合いになり、仲間を増やすことが難しくなりました。もし、研究会の運営にご興味のある方がおられましたら、ぜひご連絡ください。力を合わせて研究会を盛り上げましょう！

〔特集〕『コロナ禍で広がる、医療格差 ～パラグアイ共和国の現場から～』

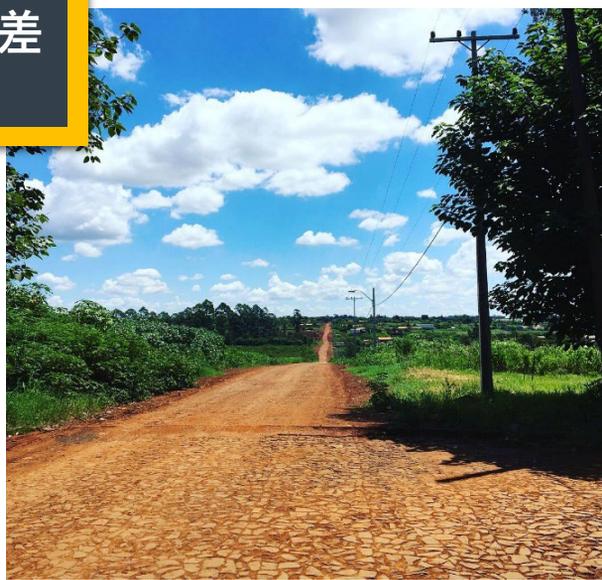
長田真弥 (姉ヶ崎ケアセンター、
2017年度1次隊パラグアイ (理学療法士))

¡Hola!

(スペイン語で「こんにちは」)

今回は、南米の中でも特に貧困率が高いとされるパラグアイ共和国における、コロナ禍のリハビリテーションを取り巻く環境の変化について報告します。

パラグアイは、南米のおおよそ中央に位置しており、ブラジル、アルゼンチン、ボリビアの3カ国に囲まれている内陸国です。面積は日本の1.1倍の約41万km²、人口は約685万人です。



パラグアイではCOVID-19に約65万人が感染し、死者が1万8千人を超えています。ワクチンは、人口の54%が1回目の接種を終えています。このような状況で、現地の理学療法士や障害のある方々がどのように生活し働いているのかを質問しました。



リカルドさん (RPT, M.S.)

長田

どこで働いていますか？

リカルド

小児のリハビリ施設です。

長田

理学療法をする時の感染予防を教えてください。

リカルド

マスクをして、手洗いと消毒、あとベッドやおもちゃの消毒もしています。でも、このような対応をしている施設は少ないです。

長田

COVID-19の患者はいますか？

リカルド

COVID-19の患者は病院で治療をします。今この施設の周りには感染者はいません。

リカルドさんの働いている施設は南米でも大きなteletonというグループであり、アルコールやマスクなどの物資の支援が行き届いているため、必要な感染対応が出来ていると感じました。私が活動していた時は手洗いでさえあまり浸透していませんでしたが、COVID-19を経験して感染予防を徹底できていることに感動しました。



リカルドさん

ニディアさん (大学教員, RPT)

養成校では講義室での授業の他、3年生は校内にあるクリニックで実習を行っています。

長田

学校の授業はコロナ前と現在で変わりましたか？

ニディア

今は全員大学へ来ていますが、マスクは着用しています。大学へ入る時は手洗いとアルコール消毒をします。カリキュラムは変わっていませんが、国内でCOVID-19患者やCOVID-19後遺症の患者が多いため、呼吸療法についての授業は増えました。

ファビィさん (RPT, 大学院生)

大学院の授業はどのようにしていますか？

長田

ファビィ

大学が作成したHPから教材をダウンロードして、ビデオカンファレンスを通して授業をしています。

卒業後はどこで働きますか？

ファビィ

病院です。理学療法士として働く経験が欲しいです。

教育内容や方法に変化があることが分かりました。パラグアイでは、学歴が高くても現場での経験がなければ発言力がないため、ファビィさんは現場勤務を希望しています。

ファビィさん
ビデオカンファレンスの様子



コロナ禍になって生活は怎么样了？

アンヘラ

ロックダウン中は、どこも開いていなかったが今では色んなお店が開いています。ただ、ブラジルからの輸入に頼っているから高くなっています。

アンヘラさんの住んでいるミンガグアス市はブラジルから近いため、多くの野菜や果物などをブラジルから輸入しています。野菜などの物価はコロナ前より70%も上昇しているようです。また、干ばつも同時に起こっており、パラグアイの郷土料理チパグアス（トウモロコシ粉をバターと卵で混ぜて焼いたもの）を食べることも贅沢になっているそうです。

医療を受けられていますか？

アンヘラ

IPS（労災保険により治療を受けられる病院）や私立病院はほとんどコロナ対応で、入院にも高額な費用が掛かります。公費で治療を受けられる公立病院では時々しか理学療法士がいない状況です。

高度な医療を提供しているIPSや私立病院では、COVID-19患者の対応に追われているため診察の機会が少なく、通常より高額な請求になるようです。

コロナ禍になって通院は出来ていますか？

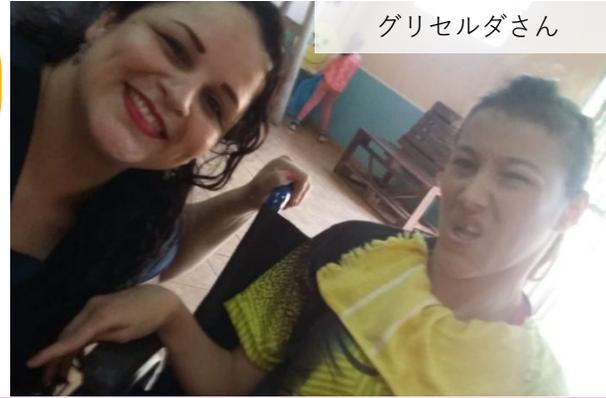
グリセルダ

出来ていません。私を施設まで送る人がいません。兄弟は学校や仕事、両親は身体を壊して連れていくことが出来ません。また、仕事が減ってお金がありません。

身体の状態はどうか？

柔軟性が低下して、特に腕の動きが硬くなっています。家族が時々ストレッチをしてくれますが、痛みやストレスを感じます。

グリセルダさん



グリセルダさんは、以前、介助歩行が可能であり、施設へ通院していました。しかし、今は車椅子を使用しており、下肢の筋力低下が生じていると考えられます。また、両親の仕事がなく通院の為に費用が払えないこともコロナ禍における影響と言えます。

コロナショックは大きな社会変化を促すと言われていますが、パラグアイの医療現場や教育現場、障害当事者の生活にも変化をもたらしていました。その一方で、医療格差にはコロナ前と変わりがないと知ることが出来ました。発展途上国の医療格差の問題は今後も取り組んでいきたいテーマであることを改めて感じる事が出来ました。

今回、現地の方とメッセージを取り合う事でリハビリテーション支援がまだまだ弱い立場であることを再確認しました。大変な状況のなか質問に快くご回答をいただいた現地の皆様には、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

[連載] 山口高橋の
研究万華鏡*

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」という声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

『研究フィールドと研究対象と。』

医療職など実践を伴う職種の場合、国内外問わず、自身の臨床・実践の場を研究フィールドとして活用することが多いと思います。その場合、実践対象（人・地域）を研究対象とした研究計画を立てることになります。海外をフィールドにする特徴の1つに、社会文化的な側面を検討できる点が挙げられると思います。

「母集団」とは、研究対象となる集団全体のことを指す言葉で、標本（≒研究対象）は母集団を代表した集団でなければなりません。「母集団」「標本」といった言葉は、疫学研究においては基本的な概念ですが、海外をフィールドとした研究を実施する場合にも重要な概念だろうと思います。地域ごとに、社会文化的な背景が多様であるが故に、自身の研究対象がどのような集団であるかを明確に認識していないと、結果の解釈を誤る危険性が高くなります。論文のタイトルによく見る「〇〇国△△州における・・・」というくだりは、結果がその集団・地域において当てはまる、ということを示しています。

領域変わって、例えば神経科学領域においては、ヒト（いわゆる健常成人）の脳機能の何らかを明らかにすることが多くあります。脳の概ねの神経活動はヒト全体に共通ですので、国や地域は問わず、結果は「ヒト」の特徴として解釈することができます。ただし、利き手、年齢、特定の疾患の有無など、脳の機能に影響を与える項目に関して対象者を選定する必要があります。このような領域においては、研究フィールドという概念はあまりあてはまりません。重要なのは対象者の“リクルート”となります。

自身も持っているフィールドの特徴を生かすような研究ができるとよいですね。

（国際リハビリテーション研究会理事、国立保健医療科学院 山口佳小里）

世界中で活動を展開している会員
のめがねを通した世界の姿を 各号
お届けします。今回は、
モンゴル ウランバートル
からです。



街中でもゲルを見かけます
(2021年10月撮影)

モンゴルといえば??まず思い浮かぶのは、「ゲル」「遊牧生活」「馬頭琴」、そして「モンゴル相撲」といったところでしょうか。しかし、知れば知るほど深い歴史や文化、環境における暮らし、そして現在の変化…ともっともっと知りたいと思うそんな魅力的な国です▼首都ウランバートルは、「世界で最も寒い首都」とも呼ばれ、-30℃にも及ぶ冬が4ヶ月近く続きます。つい先日、同僚とこんな話題で盛り上がりました。「子どもはいつまで家族と一緒に風呂に入るのか」。モンゴルでは、小学生にもなると1人で入るのが当たり前で、“一緒に風呂に入る”という発想ではなく、親は“入り方を教える”という考えであるとのこと。生活の中には、環境や家族構成、家の役割、家族制度、コミュニティ、そして子育てに対する考え方といったさまざまな背景があることを改めて考えさせられました▼リハビリにおいても、国際協力においても、やはりそこで暮らす方の日々の生活を知らなければ一方的なものになってしまう。そんなことを考えたお風呂に関するワンシーンでした▼広大な草原に暮らす方の節水術もぜひ学んでみたいものです。

【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2022・第5回通常総会開催】

日程：2022年6月12日（日） オンライン開催

総会の成立にあたっては、会員の皆様の出席または委任状の提出が必要です。欠席される場合には、委任状の提出をお願いいたします。詳細は追ってホームページ、メーリングリスト等でご連絡いたします。

【国際リハビリテーション研究会第6回学術大会】

日程：2022年11月13日（日） 愛知開催（対面実施予定）

テーマ：国際リハビリテーションの新たな可能性：内なる国際化への貢献を目指して

詳細は追ってお知らせいたします。

皆様の一般演題発表、参加をお待ちしております。

編集後記

現地の方へのインタビューを通して医療格差を改めて痛感しました。また、オンライン授業や感染対策の実施など日本と変わらない取り組みも知ることが出来ました。（長田真弥）

今年度最初のVol.15をお届けしました。日本各地、そして世界各国様々な現場で活躍されている皆さんからの声は、とても胸に響くものでした。取材や執筆にご協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。次号は7月発行予定です。お楽しみに。（大西海斗）

事務局 編集担当

古川雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）
長田真弥（姉ヶ崎ケアセンター）
三田村徳（東北医科薬科大学病院）

大西海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）
高橋恵里（東北福祉大学健康科学部）
山口佳小里（国立保健医療科学院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

